



特別企画 座談会

# 未来知しるべ

写真左から

西部医療センター  
大原 弘隆 病院長

×

名古屋市立大学  
郡 健二郎 理事長

×

西部医療センター  
山本 あゆみ 看護部長

×

高次ウイルス感染症センター  
村上 信五 センター長

×

名古屋市立大学  
浅井 清文 学長

×

名古屋市健康福祉局  
平松 修 局長

肩書は令和6年3月現在

これまで経験したことのない未曾有の事態をもたらした、新型コロナウイルス感染症によるパンデミック。名古屋市や本学、各病院において、最前線で陣頭指揮をとった方々は、どのような思いで各対応に至ったのでしょうか。未だ感染症の実態がわからなかったコロナ禍初期の状況や名古屋市と本学との連携協力等について振り返りながら、今後の危機管理の「道標」となるよう、語っていただきました。

(進行：山本看護部長 令和6年2月20日収録)

(編集・撮影：総務部広報室)



## 未知なるウイルスの到来

### ●山本

新型コロナウイルス感染症は、令和元年12月に中国の武漢市で発生し、令和2年1月30日にWHOが緊急事態宣言を発令しました。その直後のクルーズ客船ダイヤモンドプリンセス号での感染拡大のニュースは、大変衝撃的でした。まずは当時東部医療センター病院長であった村上先生に、そのダイヤモンドプリンセス号の患者さんを受け入れられたところから、お聞かせいただきたいと思います。

### ●村上

市内でトップバッターとして、患者を受け入れたのが令和2年2月14日でした。バレンタインデーだからよく覚えています。東部医療センターには第二種感染症指定医療機関として感染症病床が10床ありました。愛知県から受入要請がありましたが、詳しい情報もないまま、80歳の中国人男性が運ばれてきました。症状は軽かったのですが、言葉が通じないという苦労もありつつなんとか対応し、重症化することなく無事帰っていかれました。

初期の頃はまだ得体の知れないウイルスで、重症の方が多かったので、スタッフが感染したらどうしようみんな怖がっていましたよね。しかしそんな中でも東部医療センターの病院としての立場をきちっと理解してくださり、みなさん対応してくれました。特に嬉しかったのはコロナ対応にあたってくれた看護師さんたちが誰も辞めることなく、職場を変えてほしいという声もなく、大変強い責任感をもってくれていたこと。とても誇りに思っています。

もう1つ大きな問題だったのが、東部医療センターは感染症の第二種指定医療機関であると同時に救急もやっているんですね。ICU（集中治療室）の

## 村上 信五

令和元・2年度 市立東部医療センター病院長

令和3～5年度 市立大学医学部附属東部医療センター-特任教授  
高次ウイルス感染症センター長

## 大原 弘隆

令和元・2年度 市病院局長

令和3～5年度 市立大学医学部附属西部医療センター病院長



運用などの課題が多く大変でした。一時は救急を止めて感染症対応に集約してはという意見もありましたが、やはり東部は感染症と救急の両方の役割を果たすべきだと強く申し上げ、何とか両輪を回してきました。

## ●山本

どこの病院も感染症対応と通常医療の両立が課題だったと思います。

当時名古屋市の病院局長であった大原先生は、初期の東部医療センターの対応をどのように受けとめられたのでしょうか。また名古屋市や他施設との連携などについてお聞かせいただけますでしょうか。

## ●大原

実は新型コロナウイルス感染症がパンデミックになった頃にちょうど東部医療センターの入院・診療棟が完成したばかりだったんです。前年の12月31日から患者さんに新棟へ移動していただいて、一息ついた頃の1月中旬に、東部医療センター感染症科の長谷川千尋先生から電話がありました。私は電話があるとメモをするノートがあるのですが、見返してみるとそこに、「中国の武漢とその周辺がとんでもないことになってる。日本も同様の危険があるから、対応できるように準備すべきだ」というように言われたと記録していました。

そのあとすぐ東部医療センターでは、スタッフ向けに新型コロナウイルス感染症を知るための勉強会を開いてくれて、合計8回行いました。Webでつなぎ、西部医療センターと合同でもやっていただき

ました。

今から思いますと、東部医療センターの施設整備は、今回の新型コロナウイルス感染症のために準備されたような、本当に偶然とは思えないように感じています。整備後の新しい環境であったので、職員もモチベーション高く頑張れたのではないかなと思っています。

あと印象的だったのは、東部医療センターの感染症病床10床が満床になって、それでもどんどん県から受け入れ要請の連絡があるという状況のある日、村上先生から「ええもんがあった！」という連絡がありました。感染症の病室に必要な陰圧装置が東部の倉庫にあって、大急ぎで全部設置したと。これ実は遡ること20年ぐらい前、アジアでのSARS流行をうけて、当時東部の病院長だった津田喬子（現：市立大学交流会会長）先生が、今後同じようなことが日本に起こるかもしれないということで、市に掛け合って購入していたんです。それが20数年経って日の目を見た。

決断をされた津田先生と、それをお認めいただいた名古屋市に本当に感銘を受けたことを強く覚えてます。



## ●村上

そうでしたね。感銘を受けたと言えば、最初に対応した患者さんの国、中国の領事館から、3月頃に御礼としてサージカルマスク3万枚をいただきまして、当時病院局長だった大原先生も一緒に写真を撮ったと記憶しています。

## ●大原

その時、最初にコロナ対応にあたってくれていた看護師のみなさんや医師たちも後ろに並んで一緒に記念撮影したんです。とても印象に残っているのが、写真を撮り終えて後ろを振り返ると、看護師のみなさんが泣いてるんですね。多分、物資が不足していた中でずっと続いていた緊張感がふっと解けたのか、辛かった思いとか、いろいろな感情がこみ上げたんじゃないかと思うんです。本当に頑張ってくれているなあと感じたことをよく覚えてます。

## 附属病院群の強み

## ●山本

国内では第一波といわれるパンデミックが起きて、4月には愛知県が緊急事態宣言を出し、その後も第二、第三波と長引く混乱の中で、当時は健康福祉局医監兼保健所長というお立場だった浅井先生におかれましては、ご苦労が多かったのではないかと思います。

## ●浅井

当時名古屋市内において、コロナの診療をしていただけそんな病院は、20施設ぐらいありました。その中で初めはいわゆる感染症指定医療機関である、東部医療センターと日本赤十字社愛知医療センター名古屋第二病院に中心的に診ていただいて、他の病院では発熱外来ということで、役割分担を決めたんですけど、もう第一波の途中からあつという間に病床がいっぱいになってしまい、それで他の病院にも入院をお願いしないといけない状況がすぐ来てしまったというのが、正直なところでした。

その中では、名古屋の各病院が一体となって対応していこうという、協力体制を作ることがすごく大事だと感じていたところ、東部医療センターが最初に患者さんを受け入れることで、各病院を引っ張っていただいたと思います。

やはり医療関係者はあちらが頑張っているから、じゃあ我々も頑張ろうとか、そういう気持ちになりますよね。

そういう雰囲気を作っていくのがすごく重要だったし、東部医療センター、西部医療センター、そして名市大病院がスクラムを組んで対応してくださったのは、名古屋市全体として患者さんを診ていくという体制作りにはすごくありがたかったです。

## ●大原

東部医療センターが満床になりそうな頃、名市大病院と東部・西部医療センターでコロナの患者さんをどうやって診ていくべきかということ、郡先生や、当時の病院長たちそれぞれにご相談しました。その時の方針としては、東部が先行してやっていただいていたので、まずは東部でできるだけ診ていただいて、重症になれば名市大病院のICUにお願いすると。そして西部は小児周産期医療をやっていますので、当時妊婦さんへのリスクが未知だった状況から、発熱外来は行い、入院は東部をお願いしようという方針で、3病院で協力体制を組んだということを知っています。



### 浅井 清文

令和元～3年度 市健康福祉局医監・市保健所長  
令和4・5年度 市立大学 学長

## 山本 あゆみ

令和元年度 市立西部医療センター副看護部長  
 令和2年度 同看護部長  
 令和3～5年度 市立大学医学部附属西部医療センター看護部長

## ●山本

初めは先ほど大原先生が話されたように、小児周産期があるので、そちらの患者さんをまず安全に診るという役割がありました。感染が拡大し、西部としてもコロナ患者さんの受け入れを求められる中で、様々なニーズに対してどう答えるか、方針を今後どう変えていくのか、そしてそれを職員にどう周知して、みんなで力を合わせていくか、非常に悩み、迷いも多かったです。

通常医療と感染症対応とのせめぎ合いの中で、また、刻々と状況が変わっていく中で、西部医療センターとして求められている役割について、何度も何度も話し合って整えていきました。

実際の感染予防策について、職員の安全があってこそその患者さんの安全ですので、職員への教育についても同時に整えていきました。感染管理認定看護師たちがとても頑張ってくれました。

いざ受け入れが始まると、日に日に電話が増えて、病床が逼迫してくる状況を感じ取れました。

## ●郡

当時は仮に名市大病院の800床だけで対応してほしいと言われても、一般医療もある、収益性も考えないといけない、と未知のウイルスに対して課題だらけでした。幸いにも3病院合わせて1800床の附属病院群になって、上手に機能分化されたからこそできたと思っています。まずは、村上先生はじめ、東部のみなさんが先陣を切ってくれました。その直後に名市大病院からはそこへ医師や看護師などを派遣して一体感が生まれたと思っています。

東部だけでは無理だったと思います。それと重要なことは、看護師さんに対しても、できる限りの人と心を支援したから、村上先生が言われたように、コロナ禍のために辞める人がほとんどいなかったし、不平不満もほとんど聞かなかった。深く感謝しています。

それができたのはやはり大学としてのスケールメリットだと僕は思います。ワクチンの大規模接種の対応も、3病院で可能な限りシェアしながら乗り越えることができました。こういった一体感は、他のときにも必要だと思います。

## 郡 健二郎

令和元～3年度 市立大学 理事長・学長  
 令和4・5年度 市立大学 理事長

## コロナ禍での教育

### ●山本

コロナ禍で大学全体としては、通常の授業ができず、運営を継続していく中でいろいろなご判断があったかと思いますが、いかがでしょうか。

### ●郡

学生への支援、あるいは授業や入学式・卒業式などの式典ですね、それらの対応については事務の方が本当に一生懸命されました。感謝します。

教育行事においては、今思えば日々危機管理の勉強だったと思います。プレッシャーの連続でした。例えば入学式・卒業式はどうするのか。感染予防で対面式の開催はできない。しかし保護者からはやってほしいと連絡をいただく。そこで式典をWebで中継しました。

授業はいつからやるのか、ガイダンスは開くのか、入学式は2～3週間延ばしたらできるんじゃないか…そういった判断の連続で、先例がないゆえに、かといって他の大学などの実情を見てからでは判断が遅いんですよ。

重要なのは、やはり正しい情報をどれだけ集めるかですね。その中で決断を下すしかない。全員が賛成する決断はないわけで、ある程度腹を括っているところはありました。とにかく一番に学生の立場で考えることを大切にしました。

その年の新生は、名市大に足を踏み入れたこともない、同級生も先生にも会ったことがない、友達もいない中で、Webで授業が始まったわけですね。その学生たちに向けて、名市大ってこんなところだよという情報をどんどん発信したいなと思い、2週ごとにYouTubeに動画をアップしました。みんなはこ



うしてるよ、こういう勉強してるよっていうのを話したりして。東部にも撮りに行きましたね。

### ●浅井

大学生って一番多感な頃じゃないですか。そんな時期に友人と一緒に過ごせない時間を送った学生たちが、今後社会に出たときに、どう活躍していくのか、心配でもあり、それに対して大学としてどういうフォローをしてあげるべきなのか、今は考えています。

また一方で高校3年間をそのように過ごした子たちが今大学生になっています。学生たちに大学としてどうしてあげられるかが課題であると思います。教育学の世界ではそういう研究もされていますね。



YouTube  
「学生の皆さんへ  
学長からのメッセージ(第五報)」  
(令和2年6月公開)

## ●郡

今の浅井学長の話は全く同感です。

僕は大学生のときに大学紛争を経験しているんです。僕ら学生は半年以上、大学に行けなかった。その世代の持つ考え方はやはり他の世代とは違うんです。一番多感な頃にいかに影響を受けるのか、身をもって感じていて…だから教育っていい意味でも悪い意味でもすごく重要だなと思います。

## ●山本

教育については、ちょうど今とても悩んでいることでもあるのですが、実習がほぼできないまま就職してきた看護師たちは、知識、技術の問題よりも、現場の雰囲気が掴めていないことからのリアリティショックの方が影響は大きかったんです。学生の頃に何を経験しているのか、しっかり捉えてフォローしてあげないといけないと感じます。もちろん、そこは配慮して今も教育しているつもりですが、すぐに結果がわかるものではないので難しさを実感しています。

## 名古屋市との連携・協力

## ●山本

ここまで名古屋市との連携や協力について何度も出てきましたが、平松局長は令和2年に市健康福祉局長寿社会企画監、令和3年に市総務局市立大学監兼健康福祉局医療政策監をされていましたね。高次ウイルス感染症センター、ワクチン大規模接種など指揮されてきていかがでしたか。

## ●平松

名古屋市として市民のニーズに応えようと、当時保健所長だった浅井先生とともに悩んだことが大きく3つありました。

1つ目は最初の話にもあった入院、つまり医療体制の確保ですね。2つ目がワクチン接種。3つ目はPCR検査です。

未知の感染症だったため、感染された方もご家族の方も非常に不安

がある。初期のころは特に重症化する事例もあったため、入院を望む方が多かったのですが、なかなかそれが叶わない状況がすぐに訪れました。

東部医療センターが1例目を受け入れた2月14日から、3月の頃にはもう満床で、県内の他の病院にもお願いして受け入れていただいていた。そんな中で東部医療センターを中心に尽力いただいたわけですが、先ほども話に出たようにちょうど施設整備を終えたところということで、使っていない旧東病棟をコロナ病床として再開できないだろうかという思いから、高次ウイルス感染症センターの開設に繋がっていきました。

ただ、当時病院局を通じてそのような提案をしたら、配管が老朽化していたり、空調設備が取り外されていたりして、患者さんの受け入れは難しい状況でした。でもやはり感染者の数が増える中においては、諦めきれないものがありました。

その年の夏頃にもう一度お話を差し上げて、思い切って改修も含めてやろうということになりました。そしてなんとか翌春の開所に至りまして、実際に行って現場を直接拝見した時は、よかったなあという思いがこみ上げました。

## ●村上

令和3年4月に高次ウイルス感染症センターが立ち上がって、最初は3病院から看護師に来ていただいたんです。大きな組織だからこそできたと思います。そして先ほど申し上げたようにみなさん責任感をもって取り組んでくれたのが本当に嬉しかった。

## 平松 修

令和元年度 市健康福祉局健康部長  
令和2年度 市健康福祉局長寿社会企画監  
令和3年度 市総務局市立大学監（医療政策監）  
令和4・5年度 市健康福祉局長

### ●山本

看護師はじめ職員の中には家族に感染させないようにホテルで寝泊まりした人もいました。時には倫理的にも辛い対応を受けることもありました。

そんな状況で看護師たちは、「ちゃんと根拠に基づいて感染対策を行えば感染症の病棟にいる方が安全だ」ということがわかった。「私たちは誰1人院内感染を起こしてない」ということを、自分たちから言うようになったんですね。私はそれがすごく誇らしかったです。

高次ウイルス感染症センターの看護師たちも、きっとどの病院もそうだと思いますけど、プライドを持っていたから緊張の続く中でも働き続けてくれたんだと思います。もちろんこれは看護師だけでなく医師や検査技師もですし、コメディカルや事務もみんなそうだと思うんです。

正しい知識を得て、根拠に基づいて実践すれば怖いことはないという経験は、次に繋げていきたいと思っています。



### ●浅井

県というのは、各保健所を束ねている。一方、名古屋市は、あくまで現場ですね。

平松局長がおっしゃったように、感染拡大は人口密度の高い場所から始まりますから、その危機感も違いがあったでしょうし、今申し上げたように現場感という部分でも温度差があったように感じます。

### ●平松

そうですね、県は役割として、広く全体のバランスを見る必要があったでしょうね。

### ●浅井

そういう中でどう対応すればいいのかは、やりとりをしながらだんだんわかってきたという感じでした。

### ●村上

初期のころ、僕らが患者を受け入れるとき、どの病院が何名受け入れたのかという情報が、個人情報などの関係で全然もらえなかった。僕ら医師はお互い協力しようという気持ちで、こちらの病院が空いているなら受け入れるし、あそこの病院が空いているならお願いするし、そういう連携をすぐにとりたかった。だからリストを作ってくれとずっと県に言い続けたんだけど、最初の頃はできなかったですね。

### ●平松

その当時は病床をどれだけ持てるかが重要でしたが、そのコントロールは法的には愛知県が担っているんです。でも感染って都市部から始まるんですよ、常に。なので、市内の医療機関、特に東部医療センターが感染症の指定医療機関として病床をもってくれていたことが非常に頼もしかったです。

ただ正直に申し上げますと、どうしても県と市に意識の差があったと思いますね。

病床が逼迫する中で、軽症者等を受け入れる宿泊療養施設の確保が非常に大事なものでしたが、地域によって温度差があるんです。名古屋市内でたくさん感染者が出て、私どもはもう、早く早くって思いなんですけど、愛知県全体から見ると温度感が違ったんだと思います。いろいろ考えてくださったんですね。





## ●大原

それについては私も愛知県に何度も電話したんですよ。まるで目隠しして走らされているようなものだ。しかし当時はできないものはできないんですという対応でした。第2類相当の感染症の場合、そういった情報の提供についても法的な制限があったようです。



## ●郡

少しして落ち着いた今では、医療においては、県、市、そして医療現場の連携不足があったと思います。当時はそんなこと感じないで毎日とにかく無我夢中で医療をしていましたよね。そしてすごく感じたのは、医療の権限を県から離して政令指定都市に一元化したほうが良いということです。もし今後災害や同じようなことがあったときに、縦割りで指令を待っているようでは、患者さんが亡くなってしまうと僕は思います。機動力を持てるよう、法整備するべきだと思います。

## ●平松

実は政令指定都市にそうした権限と財源を移譲して欲しいと、名古屋市から国へ今要望も出しています。特に今回のコロナ禍の経験を考えると、今郡理事長がおっしゃったような部分は、いつかくる“次”に向けて本当に必要だと思っています。場合によっては初期的に抑えられれば、ウイルス自体が国内に蔓延しなくても済む可能性だってあるかもしれませんよね。そういう意味でも、これからは是非ともやっつけていかなきゃいけないと思っています。

## ●浅井

政令指定都市のいい側面もあります。それは保健と福祉を一緒に所管していることです。実際にコロナ禍では、例えば介護ですとかそういった福祉の担

当部局も一緒になって毎日、毎朝、情報交換をしていました。そうすることで高齢者施設で今何が起きているのかという情報が常に共有できていました。

## ワクチン大規模接種

## ●平松

ワクチン接種のことも振り返ってみます。当初は65歳以上の方を優先的に打ち始めたんですけど、感染が拡大する状況で接種ニーズは非常に多かったです。連日のように、打ってほしいというお電話をたくさん頂戴しました。なのでいかに大規模に短時間で接種を進めていくかが大きな課題だったんですよ。ちょうどその頃、東部・西部の医療センターが市大病院化し、そしてパロマ瑞穂スタジアムが建て替えに向けて休場した時期でした。本当に多くの方にご協力いただき、実施にこぎつけることができました。

個人的に忘れられないのが、娘の付き添いでパロマの接種会場に行ったら、大原先生をお見かけしたんです。先生自身が直接問診をしていらっしゃるって聞いて驚いていたら、「もう理事長も含めみんなやっていますよ」とおっしゃるので本当に頭が下がる思いでした。



パロマ瑞穂スタジアムでのシミュレーションの様子

## ●郡

本学からはワクチン大規模集団接種へ延べ5,000人を超える医療従事者を派遣しました。これもやはり3病院になったからこそできたことです。市大病院だけではできなかったと思います。

当時大規模接種を引き受けようと思った決意し、病院長の承諾はとっていたんですけど、看護部の方々にお

そるおそる声をかけたんですね。そしたら、忘れもしませんが西部の山本看護部長は「やるなら、もっと早くやりましょう！」と返事をしてくれたのです。迷いのある様子だった方もいたでしょうが、山本さんの前向きな姿勢に僕自身も励まされました。

危機の時に「どうしましょう」ではなく、皆の意見を踏まえたリーダーシップは、とても大切だと感じました。



### ●山本

ありがとうございます。西部医療センターは小児周産期があったので、最初の頃は東部がずっと患者さんを受け入れて頑張ってくれていて、名市大病院が重症者を受け入れて頑張ってくれていて、そういったスタートになった分、西部に何ができるだろうとはずっと考えていました。

大規模接種の前にも、例えば中区での感染拡大に対し、中区の医療従事者を優先したワクチン接種の依頼がありましたが、それはすぐやるべきだろうと対応しました。ですから、大規模接種についても、自分たちがやるべきことだと、私だけではなく、職員たちも認識してくれていました。

### ●郡

それから当初、接種会場の運営時間はたしか9時から17時くらいの時間帯を予定していたんです。そしたら看護部の方から「その時間だと仕事終わりの人が打てないですよ」と言ってくれて、21時まで接種できるようになっていったのです。

### ●平松

その姿勢がきっかけで、夜もできるようになったわけですね。

あの頃クラスターを止めなくてはいけない中で、もう1つ課題であったのは、福祉施設の従事者、あるいは保育園の職員、それから区役所の職員などへの接種でした。これについては、大規模接種のおかげで、かなり接種することができたんですよ。本当に感謝しかないです。

私は今回の経験でつくづく思ったのは、名古屋市にとって名市大は「かかりつけ医」という存在なのではないかと。健康や医療に関することはなんでも相談でき、身近でいつでも、とても頼りになる存在だということを改めて実感しました。



## 未曾有の災害に備えて

### ●大原

冒頭に申し上げたんですけど、東部医療センターの入院・診療棟がコロナ直前に完成し、大学病院化したのは1年過ぎてからでした。当時は市立病院でしたけど、もう一緒にやっという機運が高まっていたこともあって、3病院間では医師以外のコメディカルもいろいろ交流するようになっていた部分がありました。

先ほどの高次ウイルス感染症センターの話でも、私が病院局に着任したときは、旧東病棟は取り壊す予定だったと思います。

しかし大学病院になると施設的な規模が必要になるかもしれないということで残しておくことにしました。まさかコロナ病棟になるとは思わなかったですけど、いろいろなことで使えればいいなと思ってはいました。

今振り返ってみると、いろいろなことがいいタイミングで運ばれてきたなと、みなさんのご尽力のお

かげでここまで来たんだなという感謝の気持ちでいっぱいです。

特に村上先生はコロナ禍で大変なときでもいつも明るいですよ。その明るさに救われました。

一番覚えているのが、初期のころコロナ対応の体制を強化しないとイケないとなって、会議の場でじゃあ誰が入るかという話になったらすぐには手が上がらなくて。その時村上先生が「あみだクジにしよう！俺が線引いたる！」とおっしゃられて（笑）。一気に場の空気が明るくなったんですね。



#### ●郡

それって危機のときには、重要だと思います。

深刻に考えすぎず、“大丈夫、大丈夫”とか、“よし、これに決める！”とかそういういい意味での楽観的姿勢も、時には大切だと感じました。

#### ●村上

名古屋市と名市大には独法化する前からしっかりと連携の下地ができていたんですね。僕は何かの記録に残しましたが、「雨降って、地固まる」を引用して、「コロナ来たりて、絆深まる」と書きました。大変な思いをみなさんされたかと思いますが、その分、結束は強まったと感じています。

#### ●郡

今回のようなパンデミックは、歴史的にみると、わが国では聖武天皇の時代の天然痘、世界的には14世紀頃のペスト、20世紀初頭のいわゆるスペイン風邪などこれまで様々ありました。

人間による自然破壊の進行がパンデミックをもたらしているという説も言われています。僕はある意味でその考え方は正しいと思います。

パンデミック発生のサイクルがどう考えても指数関数的な速さで迫ってきているということです。

そうすると今度は30年後、いや20年後かもしれないと僕は思います。地震などの自然災害が起こったときも同じです。これは応用編ですから、今回の東部のように平時から準備をしていく。例えば今、名市大病院で建設を進めている救急災害医療センター。これもまさに準備だと思っています。

そもそもこの記録集は絶対に作るべきだと思っていました。これは後世の人がパンデミックとかそれに匹敵するような危機が起きた時に備えて、自分たちはどう対処したのか、忙中閑ありみたいなところで振り返られるような記録を残しておく必要があると思うんですね。例えば小学校や中学校、高校にもこの記録集を読本としてぜひ置いて欲しい。あるいは行政やメディアの方々にもぜひ読んで欲しいです。

ある意味では記録集というより、提言集になればと僕は思っています。



## 編集後記

本学における新型コロナウイルス感染症に対する対策とその経験をまとめてはどうかという話が最初に出したのは、令和3年の秋、第5波が落ち着いてきた頃でした。学内の各所属に原稿の作成を依頼していましたが、感染が再拡大してきたことにより、原稿の提出期限を一旦延期しました。その後、各所属において資料や記録等の保存を続け、令和5年5月8日に感染症法上の位置づけが5類となったことを機に、原稿作成を再開し、この度ようやく記録集としてまとめることができました。

この記録集の編集にあたり、原稿作成や写真のご提供など多くの教職員の方々にご協力をいただきましたこと、深く感謝いたしております。

また、この記録集の編集を通じて、本学が新型コロナウイルス感染症への対応において取り組んできた様々な取り組みや挑戦について改めて理解を深めることができました。大学においては、学生や教職員の安全を最優先に考え、遠隔授業やキャンパス内の感染予防対策を実施するとともに、不安やストレスを抱える学生への相談や経済的な支援等、学生に対する様々な支援を実施しました。一方、附属病院においては、患者や医療従事者の安全を確保するために、厳格な感染対策を実施し医療を継続するとともに、この地域の医療を担う医療機関の責務として、通常の診療を継続しつつ、ワクチン大規模接種への医療従事者派遣等の地域への支援を実施しました。

これらの取り組みにより、本学の教職員が協力し合い、新たな困難に立ち向かう力を高めることができ、地域社会に信頼と安心を提供することができたと考えております。

新型コロナウイルス感染症パンデミックは未曾有の試練でしたが、団結と努力によって克服することができました。今後も、協力し、学び合いながら、地域社会に貢献するとともに、世界をリードする大学を目指し、努力してまいります。

この記録集が将来に役立つことなく、同様の状況に再び直面することがないことを切に願っています。

令和6年3月

編集責任者 鈴木 峰生

(名古屋市立大学副理事長・事務局長)

編集担当 総務部総務課

東 智生

平野 雅也

篠田 紀子